

誇りと自信。そして努力

◎日比 敏男¹⁾
大垣市民病院¹⁾

【職域の拡大】「検査技師は検査室内に留まらず室外へ出向いて」ということが言われて久しいが、各種チーム医療への参画：NST（栄養サポートチーム）診療活動への参加、院内感染防止対策に関する活動（ICT（院内感染対策チーム）など）への参加、及びカテーテルによる不整脈治療等の治療支援、検診センター業務、採血業務（看護師の負担軽減）等を行っている。近年、診療の補助として検体採取に関して5項目の行為が行えるようになり、また医師の働き方改革を進めるためのタスク・シフト/シェアの推進・法改正により臨床検査技師に追加された8項目や、新型コロナウイルス感染症の影響でのワクチン接種が可能となったことは我々の業務に大きな変化をもたらしたと思われる。しかし、現実的にこれらの業務が思うように遂行されているか否かについては疑問に感じるところもある。今後、我々の業務の中で新たなニーズとされる一つに遺伝子関連業務があり、遺伝子カウンセラーや細胞治療認定管理師などが必要となってくるであろうと思われる。

【業務の効率化】検査業務は、技術開発の進歩（精密化・高速化）、医療ニーズの変化、少子高齢化（患者数の増加に相反してスタッフ数は減少）の影響、機械化=業務のプログラム化等によって効率的に実施されてきたものと考えられる。今後は更に人工知能（AI）による診断支援によって効率化（ヒトが不要？）が進むのは明らかであろう。観点を変えてみると、これまでの技術の進歩・機器の自動化によって目まぐるしい発展を成し遂げてきた臨床検査技師は、その恩恵をうけたコンピューターテクノロジーやAIの出現によって、将来無くなる確率の高い職種との見方もされている。過去においては機械を扱う Medical technician (technologist) であったかもしれないが、本来（今後は）Medical laboratory scientistであることを自覚しなければいけないと感じる。（韓国、台湾では臨床検査技師は、biomedical laboratory scientist; BLS と呼ばれている。）

【品質保証】当院は2021年9月にISO15189の施設認証を取得した。国際規格による認定取得により、検査結果の精確さの向上・良質な検査の遂行など検査の品質維持と向上に繋げている。一方、検査の正確性や迅速性のみならず膨大な検査結果を解析し、その結果を客観的に評価・提示することでの診療支援を行うことが重要であり、このことがAIを使いこなす能力やAIの開発につながるものと思われ、さらに品質向上に繋がるものと思われる。また今後は、検体採取業務や検査説明などによる検査の一貫した精度管理が重要視され、検査精度管理責任者や医療コーディネーターも必要とされてくるであろう。

【人材育成】個々のスキルアップ並びに技術・知識の向上に関して当院では、各種認定資格（二級臨床検査士18名、緊急検査士46名、認定検査技師12名など計150）を取得しており、また各種学会・研修会への参加も積極的に行っている。他方、予防医学の方面に目を向けた人材の育成が必要であると感じている。検診センター業務を担っていることはその一端であるが、AIを用いた検査結果の解析（現在よりもより上位なもの）によって、疾病の早期発見・治療の経過観察・合併症の防止対策に繋がるものと思われる。さらに、多様化する医療業務や疾患の捉え方によって、医療コーディネーターの必要性が高まることも推測される。

【おわりに】検査の現場では、今般の働き方改革等に関連して育児休暇の取得（男性も）や有給休暇の取得によって正規実働の検査技師が減少していることも否めない。AI等の出現により、“ヒトがいなくても可能な臨床検査”が現実化しそうな今だからこそ、その“共存”をどう考えていくかが大切ではないか。患者を治療できるのは医師であり、その患者のケアができるのは看護師であり、薬剤については薬剤師が熟知している。そして何より検査全般（技術や知識）についての理解は、他の医療技術者に比べて優位な存在である臨床検査技師であるからこそ、我々以外が臨床検査を行うことは不可能であると自負している。臨床検査と検査技師という立場に誇りと自信を持って更なる努力を積み重ねていくことが重要であると痛感している。

連絡先：0584-81-3341